

A decorative laurel wreath in a golden-brown color, framing the text on the left and bottom sides of the page.

洗足学園音楽大学

管弦打

コンチェルトの夕べ

2022年10月22日(土)

開演 15:00 (開場 14:30) 洗足学園 前田ホール

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

# プログラム

## E. セージュルネ：マリンバ協奏曲

*Emmanuel Sejourne Concerto for Marimba and Strings Version 2015*

マリンバ独奏 阿南 杏佳（音楽学部 3年）

## J. イベール：フルート協奏曲

*Jacques Ibert Flute Concerto*

フルート独奏 土持 志織（音楽学部 4年）

—

## R. シュトラウス：ホルン協奏曲 第1番

*Richard Strauss Horn Concerto No. 1*

ホルン独奏 佐藤 俊輝（音楽学部 4年）

## J. シベリウス：ヴァイオリン協奏曲

*Jean Sibelius Violin Concerto in D Minor Op.47*

ヴァイオリン独奏 頼近 友莉奈（音楽学部 4年）

演奏：洗足学園フィルハーモニーオーケストラ

## E. セジョルネ：マリンバ協奏曲

### 阿南 杏佳 *Anami Kyoka* (音楽学部3年)



岐阜県多治見市出身。12歳から吹奏楽で打楽器を始める。東濃実業高等学校 ビジネス管理科卒業。洗足学園音楽大学 打楽器コース3年在学中。

第35回 中部日本管楽器個人重奏コンテスト 個人の部 県大会 金賞  
第24回 長江杯国際音楽コンクール 打楽器部門 大学の部 第3位  
第4回 東京国際マリンバコンクール 第3位  
第2回 洗足学園音楽大学打楽器コンクール 第3位  
マリンバソロを深堀賢太郎、小峰弥穂、高田亮、中村祐子の各氏に師事。  
室内楽を中村祐子氏に師事。

エマニュエル・セジョルネ (1961-) はフランスのリモージュで生まれた。ストラズブル音楽院で打楽器を学んだ後、マリンバ・ヴィブラフォン奏者としても世界的に活躍している傍ら、打楽器ソロやアンサンブル曲を多数作曲している。現在、同音楽院の教授をしている。彼の作品は西洋クラシック音楽の他、ジャズやロック、民族音楽などからもインスピレーションを受けており、リズムカルでロマンティックかつエネルギーに溢れている曲がほとんどである。今日は彼の代表的な作品と言えるマリンバ協奏曲を弦楽オーケストラと共演する。

#### 第1楽章「孤愁」

Tempo souple(=しなやかなテンポで)と指定され、抒情的で物悲しい雰囲気を持っており、ロマンティックな旋律が印象的である。美しく抒情的なオーケストラの前奏の中から凄まじいエネルギーによる第1カデンツァが始まる。その後チェロが第1主題を奏でる。オーケストラは次第に厚みを増して行き強奏に達した後、旋律豊かなマリンバソロとなる。初めにトレモロで奏される部分は、これまでの暗い印象に一筋光が差すような美しい旋律である。次に現れる16分音符のリズムが特徴的な第2主題は、この後オーケストラを交えて2度繰り返される。転調後に再び現れる第1主題に乗ってマリンバが少しずつ形を変えながら進んで行き、低音セクションの強奏と同時に第2カデンツァが奏されると、再び第2主題がオーケストラのユニゾンとともに現れ、第3カデンツァが奏される。その後熱を増して第2主題が再び演奏され、儚げで静かな旋律で曲を締めくくる。

#### 第2楽章「再起」

この楽章は第1楽章とは全く雰囲気が違った、スペイン風のリズムミク的な音楽に移り変わる。トゥッティによる鋭い16分音符で幕を開け、それに共鳴するようにマリンバソロが始まる。第1主題は快活に進んでいき、やがてなだれ込むように第2主題部に突入する。第1主題とは異なる、8分の11拍子の第2主題。セジョルネ氏が得意とするスペイン風のニュアンスが感じられる音楽である。フラメンコを想起させるマリンバのフレーズが徐々に変化していき、さらに熱気を増していく。2つの主題の対比は場面変化を劇的なものにしていくと感じられる。再び第2主題が奏でられていき、カデンツァ風のソロが始まる。この場面は、ロマン派風の色彩豊かな旋律が印象的であり、マリンバのトレモロで歌うように奏でる。そして徐々に激しさを増して行き、再び第1主題に戻りクライマックスへと向かう。オーケストラとマリンバのユニゾンが多用されるこの場面は、この楽章で最もエネルギッシュである。そして最後には、この楽章の主音であるドの音を荘厳に奏でられて幕が閉じる。

両楽章の最初につけたタイトルは私がおその楽章を演奏する中で出てきた感情をつけた。

1楽章では「孤愁(こしゅう)」孤独で悲しみに満ち溢れた様子

2楽章ではそこから「再起(さいき)」する様子を表す。

それぞれの場面で表れる感情を想像しながら聴いていただきたい。

## J. イベール：フルート協奏曲

### 土持 志織 *Tsuchimochi Shiori* (音楽学部4年)



静岡県静岡市出身。  
清水桜が丘高校商業科卒業。12歳からフルートを始め、上田恭子氏に師事。  
現在、洗足学園音楽大学管楽器コースフルート専攻4年次在学中。  
第37回静岡県学生音楽コンクール第3位を受賞。Mishel Moragues氏のマスタークラスを受講。

この協奏曲は、ジャック・イベール (1890-1962) が20世紀を代表するフルーティスト、マルセル・モイーズの為に作曲した作品である。

イベールはバリ出身の作曲家。ピアノやヴァイオリンを嗜む両親の影響で、幼い頃から音楽教育を受けており、12歳より作曲を始める。いとこにあたるスペインの作曲家、マヌエル・デ・ファリャにバリ音楽院を勧められ入学し、対位法とフーガのクラスに入り、イベールはダリウス・ミヨーとアルテュール・オネゲルとの交流を深め共に勉強や仕事をするようになる。音楽院を卒業して5年後、カンタータ「詩人と妖精」でローマ大賞を受賞する。その後はオーケストラ作品や映画音楽など、幅広く作曲活動を行い、44歳の時に、今回演奏する「フルート協奏曲」が作曲される。

第1楽章は、管弦楽の短い伴奏から始まり、フルートが勢いよくでこぼことした第1主題を奏でる。第2主題は、第1主題と対照的で穏やかな旋律である。この2つの主題が絡み合いながら、クライマックスまで進んでいく。

第2楽章は、弱音器を付けた弦楽器の伴奏で、フルートが哀愁漂う旋律を奏でる。再現部のヴァイオリンとフルートの美しい二重奏は、特筆すべきものである。

第3楽章は、活気のある踊りのようなリズムで始まり、華麗で技巧的な旋律を奏でていく。中間部で音楽の表情は一変し、異国情緒溢れる牧歌的な主題が現れる。最後に、フラッターやハーモニクスといった、近代奏法を使った華やかなカデンツァがあり、輝かしく終わる。

## R. シュトラウス：

### ホルン協奏曲 第1番

#### 佐藤 俊輝 *Sato Toshiki* (音楽学部 4年)



神奈川県生まれ。12歳よりホルンを始める。  
第89回日本音楽コンクールにて第2位(一位なし)、並びに瀬木賞を受賞。  
これまでにホルンを、飯笹浩二、日高剛、高橋臣宜に、室内楽を辻功、渡辺功の各氏に師事。  
洗足学園音楽大学学部4年。

リヒャルト・ゲオルク・シュトラウスは1864年にバイエルン王国のミュンヘンでミュンヘン宮廷歌劇場の首席ホルン奏者であったフランツ・ヨーゼフ・シュトラウスの子として生まれた。シュトラウスは幼いときから父親によって徹底した、しかし保守的な音楽教育を受け、非常に早い時期から作曲を始めた。1882年にはミュンヘン大学に入学している。

本作品は父フランツの還暦の記念として、シュトラウスが18歳の時、作曲した作品である。

最初、父フランツに献呈されたが、高齢であったため父フランツは本曲を公開の場で演奏することはなかった。

1883年にピアノ伴奏版が初演され、ホルン独奏は父フランツの弟子ブルーノ・ホイヤー、ピアノはシュトラウス自身によって演奏された。

管弦楽伴奏の形での初演は1885年、ハンス・フォン・ビューロー指揮の宮廷劇場管弦楽団とその首席ホルン奏者グスタフ・ラインホスの独奏によって行われた。この作品は3楽章構成となっており、各楽章は、連続して演奏される。

第1楽章：Allegro

第2楽章：Andante

第3楽章：Rondo. Allegro

## J. シベリウス：

### ヴァイオリン協奏曲

#### 頼近 友莉奈 *Yorichika Yurina* (音楽学部 4年)



神奈川県出身。  
5歳よりヴァイオリンを始める。  
これまでにヴァイオリンを小林明代、谷裕美、水野佐知香の各氏に師事。  
2021年度、安永徹・市野あゆみによる講座の特別レッスン生。  
現在、洗足学園音楽大学4年生在学中。

J. シベリウス(1865年-1957年)はフィンランドの作曲家でありヴァイオリニストでもある。1885年ヘルシンキ音楽院に、ヴァイオリン専攻として入学するも結果が伴わず1888年に作曲家として活動を始める。このヴァイオリン協奏曲は1903年に作曲されたが、ブラームスのヴァイオリン協奏曲に影響をうけ1905年に改訂された。自身の協奏曲よりも、徹底してシンフォニックなブラームスの作品に衝撃を受けたからである。

#### 第一楽章

中央にカデンツァを配置したソナタ形式である。

シンフォニーのような重厚さ、そしてフィンランドの壮大な自然を想像させる楽章である。

出だしの弦楽器の伴奏と独奏ヴァイオリンの旋律からは、凍てつくような寒さと共にあらゆる自然の厳しさを感じさせる。

#### 第二楽章

3部形式であり、木管楽器の奏でる幻想的な導入から独奏ヴァイオリンへと受け継がれる。劇的な中間部を経て、静かに終わる。

#### 第三楽章

自由なロンド形式で、ティンパニと弦楽器によるリズムが印象的である。全楽章の中で最も技巧的であり、華やかな楽章である。

## 指揮 大井剛史 *Ooi Takeshi*



©K.Miura

1974年生まれ。17歳より指揮法を松尾葉子氏に師事。若杉弘、岩城宏之、レヴァイン、マズア、ジェルメッティ、カラブチェフスキーの各氏から指導を受ける。東京藝術大学指揮科を卒業後、1999年同大学院指揮専攻修了。1996年安宅賞受賞。2000～01年、仙台フィルハーモニー管弦楽団の副指揮者として研鑽を積み、2007～09年、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団にて研修。2008年アントニオ・ペドロッチェ国際指揮者コンクールで第2位入賞。2009～16年までニューフィルハーモニーオーケストラ千葉（現・千葉交響楽団）常任指揮者、2009～13年山形交響楽団指揮者、2013～17年同正指揮者を歴任。現在、東京佼成ウインドオーケストラ正指揮者。

このほかほとんどの国内主要オーケストラを指揮し、多彩なレパートリーと誠実な指揮でいずれも高い評価を得ている。新進作曲家の現代作品や、吹奏楽、オペラ、バレエ、など幅広い分野で意欲的に活動している。

東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師（吹奏楽）。

尚美ミュージックカレッジ専門学校客員教授。

## ～ 洗足学園フィルハーモニーオーケストラ ～

Flute	宮川彩音	前川美月				
Oboe	小中ひかる	末松美香				
Clarinet	山形珠慧	二瀬結衣				
Bassoon	前澤美里	吉田南				
Horn	中津里菜	石塚麻純	大塚 季	佐藤 駿		
Trumpet	高橋里沙	中山亜実				
Trombone	鵜飼 杏	津吹亮汰	下村壮平			
Timpani	島津 翠					
Violin 1st	大谷桜子	腰高多恵	鈴木美智子	澤田香萌	井上 葵	
	成田 叶	山崎響子	宮永理央	田中彩生	澤崎杖也	
Violin 2nd	雨川笑子	井上千恵美	前田明日香	藤本翔大		
	志村瑠南	菱田あゆみ	佐々木蓮奈	大槻茉莉子		
Viola	高橋 楓	池田菜々子	門井晴子	粟國朝陽	中里彩夏	有山志音
Violincello	奥平華子	丹野陽介	佐伯江梨花	大友美侑	有馬 懂	
Doublebass	平木晶穂	嶋野晴斗	高野響花	奥山尋冬		

企画運営責任者 渡部 亨

助手 中村日向子 角田一久

アカデミックコーディネーター 小板橋沙織

主催：洗足学園音楽大学・大学院